

コシヒカリの食味向上を目指した 幼穂形成期の生育を指標とする 穂肥施用法

—幼穂形成期の草丈・葉色で簡単に判定—

【穂肥施用量判定法】

・・・詳しくは裏面を見てください

- ①診断時期
幼穂形成期（幼穂長1mm時）
- ②施用時期
幼穂長8mm時（第2穂肥は無施用）
- ③診断項目
草丈・葉色（SPAD値）
- ④診断方法
診断結果を基に診断表で穂肥窒素施用量
を決定

穂肥は
1回施用



草丈と葉色で
施肥診断します

[成果の内容・特徴]

○幼穂形成期に草丈・葉色を調査し、その結果を基に穂肥を施用した場合、従来の穂肥施肥法(窒素2kg/10a・2回施用)と比較して、玄米タンパク質含有率は低下します

○収量は同等です。



葉色診断は
葉色板でも可能



[具体的データ]

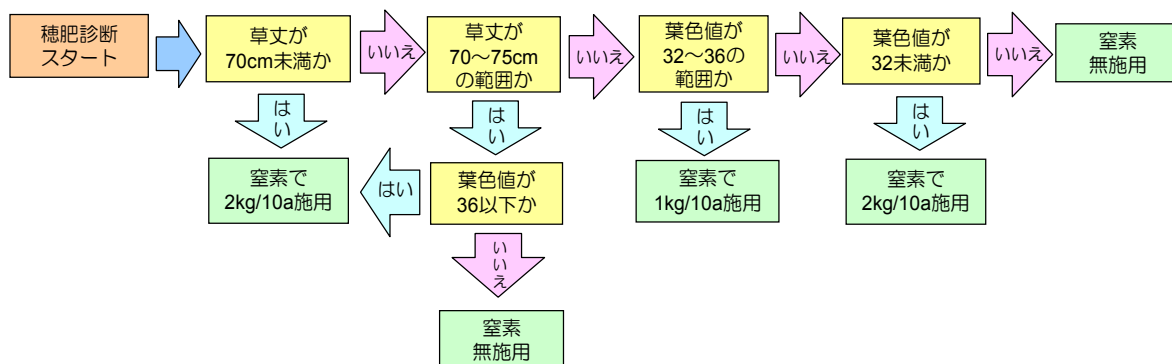


図1 穂肥施用量判定法

- ①診断時期：幼穂形成期（幼穂長1mm時）
- ②診断項目：草丈・葉色（SPAD値）
- ③診断方法：診断結果を基に上の診断表で穂肥窒素施用量を決定
- ④穂肥施用時期：幼穂長8mm時（第2穂肥は無施用とする）

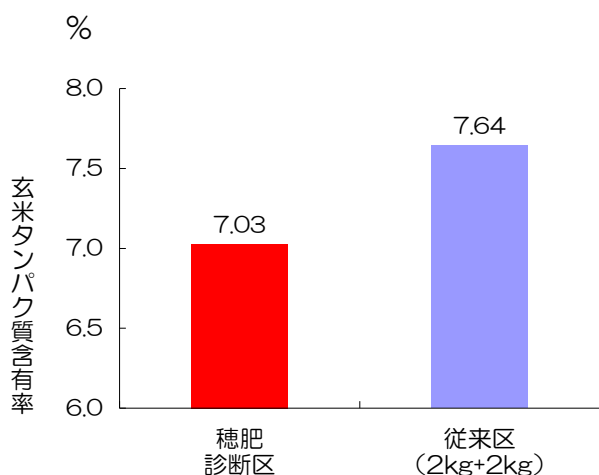


図2 穂肥診断実施区と従来穂肥施用区との玄米タンパク質含有率の比較（2008-2011）

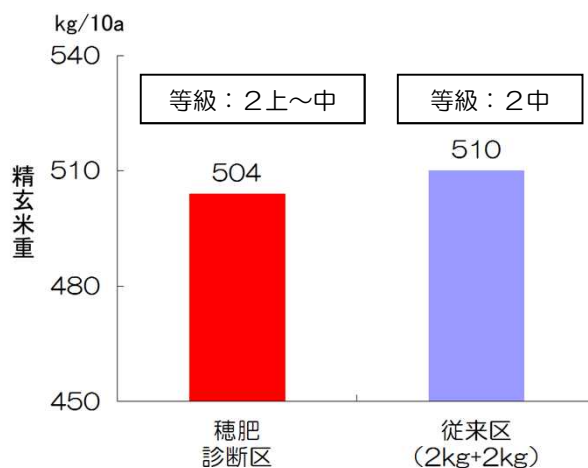


図3 穂肥診断実施区と従来穂肥施用区との精玄米重の比較（2008-2011）

注釈)各試験区の穂肥は硫安を使用。耕種概要：品種コシヒカリ、調査場所：農業試験場、(2008・2009)、日野町(2008・2009)、江府町(2010)、三朝町(2008～2010)、八頭町(2008～2011)。施肥以外の栽培管理は農家慣行。重量は水分15%換算。精玄米重は1.85mmのグレーダで調製。玄米タンパク質は近赤外測定による。

留意点

1. 本情報は農業試験場内ほ場（標高13m）及び現地ほ場である日野町下榎（標高214m）、江府町宮市（標高250m）、三朝町今泉（標高40m）、八頭町大坪（標高88m）において2008年から2011年に得たものである。
2. 地力が低く、生育後期に葉色が極端に落ちるほ場では等級が低下する恐れがあるため適応を避ける。
3. 葉緑素計SPADによるCM値から葉色板測定値への変換は可能である（新しい技術第33集：参考となる情報・成果）。

（問い合わせ先）

鳥取県農林総合研究所 農業試験場 環境研究室 TEL：0857-53-0721

※ 本書から転載複製する場合には必ず農業試験場の許可を受けて下さい